

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23310172

研究課題名(和文) 北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割

研究課題名(英文) "The Role of Returnees from Sakhalin in the Multiculturalism of Hokkaido"

研究代表者

パイチャゼ スヴェトラナ (Paichadze, Svetlana)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・研究員

研究者番号：10552664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円、(間接経費) 3,210,000円

研究成果の概要(和文)：「北海道多文化共生におけるサハリン帰国者の役割」(科研基盤(B)で以下の問題点を明らかにした。帰国政策は、国民国家の枠内で行われ、今日まで引き揚げできなかった「日本国民」に対する政策である。しかし、同伴する若い世代の「残留日本人」は、多重的なアイデンティティを持ち、多言語・多文化的な存在であるのが実情である。その生活世界はいくつかの国にまたがり、サハリンの場合では彼らはロシア、韓国、日本という多文化生活空間に生きている。このような生活空間を単一言語・単一文化的な国民国家の政策に入れ込もうとすると、不可避免的に、新たな離散家族が生まれ、日本社会への統合の問題も発生する。

研究成果の概要(英文)：The following points were clarified by the research project "The Role of Returnees from Sakhalin in the Multiculturalism of Hokkaido" (JSPS Grant Kiban B, 2011-13): 1. Returnee policy in Japan is carried out within the framework of the nation-state. It is a policy for Japanese people who had previously failed to return. However, 2. The young generation returnees have multi-layered identities and represent a multilingual and multicultural reality. Their multicultural living space extends over Russia, South Korea, and Japan. 3. The policy of the nation-state is based on the existence of a single language and a monocultural living space. Inevitably, some families become separated. Furthermore the problem of the integration of returnees into Japanese society is also generated.

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：帰国者 東アジア 移民

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、グローバル化の進展に伴って、日本には多くの外国人・帰国者が流入し、その滞在期間も長期化していく傾向がみられる。それぞれの地域社会でこのような人びととどのようにして共に生きていくかは重大な問題であるが、単に共生を謳い文句とするのではなく、それを実質化するには、その根底にある歴史学、政治学などの問題を新しい多文化・多言語視点から検討する必要がある。すなわち、帰国者たちを日本社会あるは歴史記述の宝庫として捉えなおすことである。

北海道は、愛知県や群馬県の一部地域とは異なり、外国人の「非集住地域」であるというイメージが強く、今までは多文化共生の問題もあまり取り上げられていなかった。札幌市でさえ、総人口は1,905,353人であるのに「外国人登録者数」は9,562人にすぎないというのは、たしかに、外国人・帰国定住者の「非集住地域」であると言ってよいかもしいない。

しかし、内実を見れば、北海道は先住民と外国人長期滞在者という2つのマイノリティグループが居住し、日本では他に類のない地域である。外国人滞在者には、中国のみならずサハリン/樺太からの帰国者が定住している。

北海道では、平成22年3月1日現在、中国帰国者は120世帯351人が(札幌87世帯、221人)定住し、樺太帰国者は68世帯173人(札幌25世帯91人)が暮らしている。(北海道中国帰国者支援・交流センター2010)。二世・三世を含めた総数は、その人数を大きく上回ることは言うまでもない。戦後樺太からは数十万の日本人が引き揚げて各地に移住したけれども、今も帰国者がいることは世間によく知られていない。北海道の特徴は、そのようなサハリン/樺太からの帰国者が多いことである。現在のサハリン/樺太帰国者はが通常のロシアからの移住者とは大きく異なることを確認した。その大きな特徴は、滞在期間があらかじめ限られている外国人研修生、留学生、労働者と異なり、永住を見据えて、最初から家族連れで、場合によっては数世代の大家族で来日していることである。また、日本・ロシア・韓国のトリプルアイデンティティを持つ特殊グループであり、北海道および日本の多文化共生を模索するうえで重要な人材である。

2. 研究の目的

サハリンと北海道の関係を新たな視座から問い直し、多文化社会を形成する道筋を示す。

すなわち、サハリンと北海道の間の「民族移動」を分析し、次の3点を明らかにする。

- (1) 北海道の多文化共生の特徴を明らかにする。
- (2) サハリンを日本の歴史的文化遺産として

見直す。

- (3) 国境の政治問題化を超えて、日露韓関係を新しい人道的・文化的な視点から明らかにする。

3. 研究の方法

オーラル・ヒストリーの手法に基づく聞き取り調査で得られた資料を歴史学、社会学、教育学、観光学の視点から分析する。研究組織をテーマに沿って次の3つの班に分けた。

(1) 「北海道多文化共生」班

(2) 「サハリン日本文化遺産」班

(3) 「日露韓関係史」班

3つの班はサハリン帰国者を研究の基礎に置くことは言うまでもないが、申請者(パイチャゼ)が全ての班に加わって統括し、連携を図った。

4. 研究成果

1989年に結成された「サハリン同胞交流協会」(現・日本サハリン協会)が、サハリン残留日本人の帰国支援の窓口になり、1990年代からこれらの人々の一時帰国や永住帰国が実現した。1994年には「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」(中国帰国者支援法)が制定された。サハリン残留日本人は「中国残留邦人等」に含まれるので、その処遇も中国残留日本人のそれに準ずるものであった。中国帰国者支援法によって、当人に1世帯の同伴が認められることになり、サハリン残留日本人の永住帰国も本格化することになった。現在は「1世」から「4世」まで4代に亘るサハリン帰国者が日本に定住している。その結果、就業、住宅、修学などが新たな問題として浮上している。教育・進学に伴う困難、就職の難しさによって帰国者は日本社会の人材ではなく、負担になり、社会的なリスクグループと見なされている。

その背景には次の事情がある。帰国政策は、国民国家の枠内で行われ、今日まで引き揚げできなかった「日本国民」に対する政策である。しかし、同伴する若い世代の「残留日本人」は、多重的なアイデンティティを持ち、多言語・多文化的な存在であるのが実情である。その生活世界はいくつかの国にまたがり、サハリンの場合では彼らはロシア、韓国、日本という多文化生活空間に生きている。このような生活空間を単一言語・単一文化的な国民国家の政策に入れ込もうとすると、不可避免地、新たな離散家族が生まれ、日本社会への統合の問題も発生する。

「北海道多文化共生におけるサハリン帰国者の役割」(科研基盤(B)で上記の問題点を明らかにした。

具体的にこれまでの研究成果の概略は次のとおりである。

パイチャゼは、ロシア学校や札幌市立大通り高校の母語サポータ教員として、また、CaSA NPO (Child-assist Sapporo Association) 代表として、多言語・多文化

教育の視点から帰国者子女の日本語とロシア語の習得や進学・就職の進路などの教育問題について考察を続けた。(Paichadze S., Din Y. "Russian Schools in Sapporo and Seoul", "Migrants and Minorities in Eurasia" 国際学会にて発表、"A comparison of general and specific features of Russian schools of Sapporo and Seoul" 論文を国際広報メディア・観光ジャーナル 18号へ投稿)

また、各世代の帰国者とインタビューを重ねて、「サハリン残留日本人」の帰国理由の多様性、言語やアイデンティティに関する世代間の相違を明らかにした。そうした相違点が、彼らの日本社会への統合に大きな影響を与えている。(Paichadze S. "Voices of the Borderland Community: the Identities and Educational Issues of "Repatriates" from Sakhalin", BRIT 国際学会にて発表、同タイトル論文は *Karafuto / Sakhalin: Voices from the Shifting Russo-Japanese Border* (パイチャゼ S.・シートン Ph.編集)に投稿、Rutledge 出版社、契約済み、2015 年出版予定)

さらに申請者は、分担者の玄武岩とともに、「サハリン在留者」の日韓家族に数多くインタビューした。これと並行して「サハリン同胞交流協会」(現・日本サハリン協会)の一次資料の整理もした。これらの聞き取りや資料の分析から、帰国者の日韓露のトリプルアイデンティティや多文化的生活空間という仮説の真実性が明らかになった。(Hyun M., Paichadze S. "Multi-layered Identities of Returnees in their "Historical homeland": Returnees from Sakhalin", *Karafuto / Sakhalin: Voices from the Shifting Russo-Japanese Border*)

分担者宮下雅年とフィリップ・シートンは、戦後の引揚者の現在における樺太/サハリンに関する意識を「故郷」再訪ツアーや各種記念行事を通じて調査した。これと上記の研究結果の比較から、初めて、かつての「引揚者」と現在の「帰国者」のアイデンティティの差が明瞭になった。後者を「50 年後の引揚者」と見なす扱いは不十分であると判断した。

以上の到達点やさらなる問題点を討論するために、「ユーラシアにおける移民と帰国者」(2013 年)「北海道における多文化共生その理念と実践」(2014 年)などの国際シンポジウムを行い、同様の「帰国者」が居住している韓国とドイツからも研究者を招いた。これにより、帰国者のアイデンティティや言語、教育、ホスト社会統合等々の問題は、韓国やドイツにもあることが確認できた。極東地方における民族移住における帰国者の問題を "Russia and the Asia-Pacific region: migration and problems of cross-cultural communication" の論集にまとめる予定である。(契約済み、2015 年出版予定)

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

Paichadze S., Din Y., (2014)

"A comparison of general and specific features of Russian schools of Sapporo and Seoul", 『国際広報メディア・観光ジャーナル』18号, pp.91-114, 審査あり。

Paichadze S., (2013), "Современная репатриация: возвращение на Родину или иммиграция?" ("Contemporary repatriation: the return to homeland or immigration?"), Proceedings of International Conference on Social Communication and the Evolution of Societies, Novosibirsk State Technical University, pp.122 - 129, 審査なし

ハ`仔ヤ` ス`エトナ (2012) 「非集住地域における外国人・帰国児童生徒の教育問題」、『移民研究年報』第 18号、pp. 151-161、審査あり

玄 武岩 (2014)

「サンフランシスコ体制のソフトパワー的転換と日米韓疑似同盟」、『黄海文化』第 83 巻、pp. 未定、審査なし

玄 武岩 (2013)

「中国残留日本人」をめぐる包摂と抵抗 「本国帰国者」という多重的アイデンティティの可能性 (日本批評)」(8), pp. 118-153, 審査あり

玄 武岩 (2011)

「コリアン・ネットワークからみるディアスポラ・メディアの地平」、『マス・コミュニケーション研究』第 79号、pp. 27-44、審査あり

ウルフ デイビッド (2011)

「日露戦争とサハリン島」、『サハリン 樺太の一九〇五年、夏：ローカルとグローバルの狭間』(論集) pp. 397 - 414, 審査あり

Philip Seaton (2011)

"The Centenary of the Annexation of Korea in the Japanese" *Japan Space*, Vol. 9, pp. 397 - 414, 審査あり

[学会発表](計 13 件)

パイチャゼ スヴェトラナ、玄 武岩

サハリン「本国帰国者」のトランスナショナルな特性、和歌山大学、和歌山県 2014.6.29、発表決定

Paichadze S., Din Y.,
Inter-generational Differences in
Migration Strategies of Sakhalin Koreans
in South Korea, ASCJ, Sophia University,
Tokyo, 2014. 6. 21、発表決定

国際シンポジウム(北海道大学)
北海道における多文化共生: その理念と実践
(札幌市 2014. 3. 1・2)

兔内 勇津流
「多文化共生における図書館の役割」
玄 武岩・パイチャゼ スヴェトラナ
「サハリン帰国者の日韓露のトランスナ
ショナルなアイデンティティ」

国際シンポジウム(北海道大学)
Migrants and Returnees in Eurasia
(札幌市 2013. 2. 12・13)

David Wolff
Return of the Kharbinty: Putting the
Repatriation of 1945 in Context.

兔内勇津流
「南サハリンにおける D. N. クリュコフの
行政と日本人社会」

フィリップ・シートン
「北海道における樺太の記憶」
玄武岩

「歴史なき民の復権: 極東ロシアにおける
「故郷」の再生」

スヴェトラナ・パイチャゼ
「現在の帰国者と「故郷」の問題」

BRIT 国際学会 *Borderland Voices: Shaping a
New World Order*

(福岡市, 2012. 11. 13・14)
パネルプレゼンテーション: *Home in the
Borderland*

Moderator & Commentator: David Wolff

Svetlana Paichadze
Voices of the Borderland Community: The
Identities and Educational Issues of
"Repatriates" from Sakhalin"

Hyun Mooam
North Korean-South Korean Disputes
over the "Home" of Sakhalin Koreans"

Philip Seaton
Memories Beyond Borders: Karafuto Sites
of Memory in Hokkaido"

Masatoshi Miyashita
"Homecoming" Visits to Karafuto

〔図書〕(計 2 件)

Svetlana Paichadze, Philip Seaton
*Karafuto / Sakhalin: Voices from the
Shifting Russo-Japanese Border*
Routledge, England, 発行決定 2015 年

Paichadze Svetlana, Vishnyakova Natalia
Russia and the Asia-Pacific region:

*migration and problems of cross-cultural
communication*

SPSTL SB RAS, Russia(契約済み、2015 年
出版予定)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織 北海道大学
(1)研究代表者

パイチャゼ スヴェトラナ
(Paichadze Svetlana)
北海道大学大学院・メディア・コミュニケー
ション研究院・研究員
研究者番号: 10552664

(2)研究分担者

ウルフ デイビッド
(David Wolff)
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号: 60435948

P・A シートン
(P.A. Seaton)
北海道大学・留学生センター・教授
研究者番号: 70400025

玄 武岩
(Hyun Mooam)
北海道大学大学院・メディア・コミュニケー
ション研究院・准教授
研究者番号: 80376607

宮下 雅年
(Miyashita Masatoshi)
研究者番号: 90166174
北海道大学大学院・メディア・コミュニケー

シヨン研究院・教授

兔内 勇津流

(Tonai Yuzuru)

北海道大・学スラブ研究センター・准教授

研究者番号： 50271672

長野 督

(Nagano Koh)

研究者番号：30312408

北海道大学大学院・メディア・コミュニケー

シヨン研究院・教授

中地 美枝

(Nakachi Mie)

北海道大学・スラブ研究センター・研究員

研究者番号：90567067

(3)連携研究者

(0)

研究者番号：